

東欧ブダペストの水辺空間整備について

企画調査部 副参事 高橋 正夫

1. はじめに

昨年9月に2週間かけて欧州の街とその水辺空間の整備状況を視察する機会を得て、ドナウ川とライン川を中心に視察を行ってきた。西欧での河川整備が都市部における水辺空間整備の良い事例として紹介されていることから、東欧での整備はそれらに比較してどうなのかという視点を持ちつつ、その出発点として世界文化遺産の一つであるハンガリーの王宮（ハンガリーでは世界文化遺産は2箇所）があるドナウの真珠ブダペストを訪ねた。

2. ハンガリーの概要

ハンガリーは国土の3分の2が平地で、ハンガリー大平原と呼ばれる。そのほぼ中央をドナウ川とその支川ティサ川が流れ、豊かな農業地帯を作り上げている。気候は、大陸性気候で年間を通して温和な気候である。このハンガリーの首都ブダペストは、人口が200万人を越えるという東欧では珍しい大都市である。その歴史は古く石器時代まで遡り、10世紀にマジャール人が姿を見せ、13世紀にブダの丘に王宮を築くのを契機に、ルネッサンス期に繁栄の絶頂期を迎えた。

3. ドナウ川の概要

ドナウ川はドイツの黒い森を水源とし6カ国を流れ、黒海へ流れる流路延長2,850km、流域面積817千km²のヨーロッパ第2の河川である。今回訪れたブダペストの中心地は河口から1,640km～1,650km周辺に位置する（写真－1）。ハンガリー周辺におけるドナウ川の河床勾配は約1/4,000とかなり緩い。



写真－1. ドナウ川とブダペスト（中の島マルギット島）

4. ブダペストの町並み

まちの中心をドナウ川が流れており、西のブダ地区と東のペスト地区を分ける線として存在しており、それぞれの地区は性格がかなり異なる。

ブダのまちは高台にあり、かつてのハンガリー王の居城があった地区であることから政治的な中心地としての性格を強く持っている。くさり橋の河畔の高台に王宮は築かれ、全盛期の王の名にちなんだマチャーシュ教会や漁夫の砦、またまちを一望できるゲッレールトの丘などがある。

これに対し、ペスト側はまち自体が平坦な地形であることから、下町的な性格を持ち、市の繁華街やオフィス街を形成している。特に河川沿いにあるネオゴシック調の建築物である国会議事堂がその地区の中心を形成している。

夜には右岸の王宮（写真－2）、くさり橋（写真－3）そして左岸の国会議事堂によるイルミネーションが対をなして華やかな雰囲気醸し出している。



写真－2. ブダの王宮



写真－3. 王宮から見たくさり橋

5. 水辺空間整備

ブダペスト市内においてドナウ川は北から南へ流れ、川幅は市内の上下流で 400m から 500m であるのに対して市内では狭窄部を形成し、最も狭いエルジェーベト橋付近では約 230m の川幅しかもたない。河床勾配がかなり緩いにもかかわらず、平常時でも流量が多いことからいわゆる河原は存在せず、河川が直線的かつ掘込み河道の直壁護岸であることから、流速はかなり速く 1m/s を越えていたようである。水質も砂泥等を含み濁っており、臭いはなかったが“美しき青きドナウ”とはかなりかけ離れていた。

市街地の中心を流れる河道は、堤内地に建築物等が張り付いていることから狭窄部を形成している。よって幹線道路が直壁護岸下に兩岸とも堤外を走っており（写真－4）、洪水時にはこの幹線道路は水没する。河川沿いにある階段工は船の接岸時にのみ利用されている。河道内では、護岸に船が常時接岸されており、これらの船は喫茶、食堂、ディスコ利用の他に車の展示も行っている。ドナウ川における舟運利用はかなり多いが、ボートやカヌーの類は流速が速いため利用できない状況である。

左岸では幹線道路と川との間のわずかな幅に散策道を設け、橋詰め公園とともに植樹やベンチ等設置し、人々の憩いの場として整備している（写真－5）。また堤防天端においても、植樹帯を設けてコンクリートの直壁護岸の堅さを少しでも和らげる工夫がされている（写真－3）。

堤内においてはホテルや食堂が点在し、その河川側の庭にはバラソルとテーブルそして椅子のセットが置かれ、多くの人たちが利用していた。夏には一大ピヤホールのようなものが連なるのではないと思われる。

また、河道内の中の島、マルギット島（長さ 2.5km、幅 0.5km）は島全体が、1 万本の樹木、噴水、バラ園、スタジアムを始めとする公園整備が図られ、マルギット橋により車や市電によるアクセスがされ、市民だけではなく観光客まで幅広く利用できる憩いの場として整備されている。

このマルギット橋を始め、市内の中心には多くの有名な橋が架かっており、下流からペトゥーフィ橋、自由橋、エルジェーベト橋、くさり橋そしてマルギット橋などそれぞれの橋は個性を持っている。下流のペトゥーフィ橋からは上流のマルギット島の温泉ホテルまでの間にドナウの渡しがあり、この間には 8 箇所のストップが設けられている。



写真－4. 左岸の幹線道路



写真－5. 左岸の橋詰部

6. おわりに

現在のブダペストとなったのが、くさり橋により結ばれた19世紀後期以降である。よって、まちで見かける建物の多くはここ百年に造られたもので、水辺空間の整備自体もまだ新しい。市街地の中心で河道が狭窄部を形成し直壁護岸となっていてところでも緑化を行うなど河道内から堤内側まですべて利用が図られ、また舟運利用等からも水辺が町の中心“顔”であるという市民の意識が感じられ、水辺への景観的、親水的配慮は、西欧と同程度の評価がされてもいいのではないと思われる。

現在、国内でも水辺の役割が特に都会で再認識され、水辺とまちづくりが一体となった整備が進められているが、既に市街地が形成された場所でも、20年30年後をにらんで河川沿いに用地を部分的にでも取得し、植樹も含めた河道整備を進めることは重要ではないと思われる。